「孤独」を描く

鈴木裕美

「全ての優れた戯曲は孤独をテーマにしている」という言葉を聞いたことがある。恋をしたことがない人は、比較的少数であるとは思うが、存在するだろう。しかし、「自分は一人ぼっちだ」と感じたことのない人は、例え０歳児でもいない。３０００年前でも３０００年後でも、アメリカでもブータンでも。世界に絶対は存在しないと思うが、「一人ぼっちだと感じたことのない人間はいない」には、絶対という言葉を使っても構わないのではないだろうか。「孤独」は全ての観客に我が事として受け止めてもらえるテーマであるし、逆に言えば、人間を描こうとすれば、孤独を描かざるをを得ないということになるのだと思う。

今回の応募作も、どの作品も孤独にあえぐ人々が登場する。そして、ほとんどの作品から「自分が孤独なのは誰のせいなんだ？」という叫びが聞こえたように思う。あまりにも捻りのない考察だ、という誹りを恐れずに言えば「今、自身が生き難い現実を誰かのせいにしたい、誰かのせいにでもしなければやり切れない」私たちの国の現実をヒリヒリと感じた。

その他にも、お金、老い、死、母親、といった事柄が多くの作品に共通して扱われている。もちろん作品はそれぞれ固有の成り立ちがあるのは理解しているが、重なる部分が多いと、どなたの作品が最も真摯にその事柄と向かい合っているか、比べてしまったのが事実だ。

どの作品が一番、生き難い私たちの生活に優しく、面白く、嘘をつかずに寄り添ってくれるだろうか？あるいは新しい現実の見方を示してくれるのだろうか？そして、ほんのささやかであっても私たちの生活を生き易くしてくれるだろうか？

くるみざわしん氏の『同郷同年』は、軽やかではない会話の内容を、観客を楽しませながら手渡す手法に好感を持った。

５景から成る物語は、全て谷上薬局の待合室で進行する。同じ待合室が、秋→初冬→夏→秋と季節が変わる中で、一般的待合室→薄汚れた待合室→放射性廃棄物最終処分場誘致運動の事務局→県議選事務局→リニューアルオープンの待合室と姿を変える。３人の登場人物たちの服装も劇的に変化する。明確なト書きが美しい。観客は場面が始まる度ごとに、３人のパワーバランスは今度はいったいどうなってしまったんだろうと興味を持つだろう。特に５景、汚れた野良着で登場する田切が、実は議員になっているところ、典型的に観客をミスリードするやり方であるが、まんまと騙された。笑える部分も多い上演だったと想像する。この容易には飲み込み難い物語を、観客に気付かぬうちに飲み込ませてしまおうという作戦のあれこれに、作者が観客に伝えたい事が明確にある美しさ、真摯でシンプルな強い意志を感じた。

山本正典氏の『あ、カッコンの竹』は他の誰とも似ていない、独自の美意識に強く惹かれた。全ての台詞には「、」「。」の句読点が書かれていない。言葉の音の美しさ、リズムの

楽しさを強く感じる戯曲であり、観客もその心地よさに誘われて、うっかり竹やぶの中に迷い込んでしまうだろうと感じた。この先何を書かれるのか、期待したいと思う。

授賞式後の恒例の飲み会で、橋本健司氏と話した。『はつゆき』の出演者は作者以外俳優ではなく、上演された菓子司 中西与三郎で働く現役の菓子職人さんたちであり、その方たちへの当て書きであったこと。出演予定であった菓子司のご主人が出演できなくなり、男性の役を一つにまとめ、運転手さんとして全て作者が演じたことなどを聞いた。なぜ一人の俳優が演じなければならないのか、その意図は何か、戯曲からは読み取れなかったのだが、そういう事情かと納得はした。また、橋本作品ではないが、選考会に於いてト書きの不備についての話題があった。

OMS戯曲賞は書き下ろし、上演された戯曲である事が応募の条件になっている。しかし、上演と違っていても、本来作者が書きたかった設定に戻して、あるいは上演時には足りなかったト書きを加筆して応募してもいいのではないかと思ったことを記しておく。